PA-082

急変・急変予期情報収集シート導入についての活動報告

武蔵野赤十字病院　クローバー６階病棟
○大槻　真里、稲葉　香、小林　圭子、城尾　優理、中川原　好栄、平野　裕美、宮秋　昌志、山嵜　昭子

【取り組みの背景と目的】当院の急変対応システムである「院内ホットライン」は、蘇生チームとして患者の急激な容態変化に対応しているが、診療科間の認識の相違などを理由に早期対応システム（RRS）としての十分な機能を果たすまでには至っていない。院内ホットライン要請記録の集計と分析は行っているが、院内ホットラインを要請せず当該診療科で対応が完結した急変や急変予期症例の把握はできていない。そのため、今回は急変や急変予期症例の把握と対応の向上を目的に、急変･急変予期情報収集シート（以下、シート）を作成し、全部署において急変予期対応向上委員が主体となり取り組みを開始した。
【取り組みの実際】2013年12月～2014年２月の情報収集期間で28症例の報告があった。異常の内訳は呼吸（37.5%）が最も多く、次いで循環、意識であった。必要とされた対応は原因検索、気道管理、全身管理などであったが、実際の対応は原因検索（27%）、様子観察（20%）などであった。その理由として、看護師のアセスメント不足、看護師―医師間のコミュニケーション不足、当直医による対応不足の可能性が抽出された。シート記載に要する時間が10～60分間と負担が大きい反面、記載自体が振り返りの機会となる、急変情報を病棟全体で共有することで次の機会に活かせるとも評価された。
【今後の課題】各症例についてデブリーフィングを行うことや、症例を活用して、看護師のアセスメントやコミュニケーション能力の向上を目的とした「急変予期・対応向上研修」の部署展開の継続を推奨していく。
また、記載しやすいシートへの改訂や、シート運用継続による情報収集と分析結果の提供と共に、実施意義の周知を拡大し、活動に対する組織的な支援を求めていく。

PA-083

入院で化学療法をうける大腸がん患者のニーズの実態調査

山口赤十字病院　看護部
○江本　悦子、田口　まりえ、岡本　範子

【はじめに】FOLFOX・FOLFIRI療法は外来で施行することが主流となっている。しかし、Ａ病院では入院の希望が多く３分の２の患者が入院治療を受けている。そのため、患者はなんらかの期待を持って、自ら入院を選択し化学療法を受けていると推察した。そこで、今後の入院化学療法看護へ役立てるため、入院で化学療法をする大腸がん患者のニーズはどのようなものがあるのかを実態調査した。
【研究方法】入院中のFOLFOXまたはFOLFIRI療法施行２クール目以降の患者５名に対し半構成的面接を行い、逐語録を作成。入院を選択した理由を中心に因子探索型内容分析を行った。
【結果】入院を選択した理由として＜外来治療への不安＞＜思い込み＞＜医療者からの助言＞＜経済的理由＞＜治療中のサポート＞＜闘病仲間との交流＞の６カテゴリが抽出された。
【考察】患者は外来治療に対し不安を感じ、医療者から助言を受け入院を選択していると考えられる。しかし、医師の説明を整理できないため､治療は入院でするものと思い込んでいる患者も存在した。患者は入院することを安心と捉えていた。これは、看護師の迅速な対応や相談のしやすさ、医師との橋渡しなど入院はサポートが受けやすい環境であるためと考えられた。患者の看護師やその他医療職者に求めるサポートを充足していくことは、患者の治療継続の意思を支えるうえで、重要になってくると考えられる。闘病仲間との交流は、入院中に仲間の話を聞き気持ちを切り替えることで、治療継続の励みとなっていると考えられた。
【結語】治療中のサポートを含めた日々の看護ケアのみならず、入院の場を利用し、本人の意思をもう一度確認することによって、患者個々のライフスタイルに合わせた治療方法の選択ができるよう支援していくことが必要であると考える。

PA-084

肺がん化学療法の副作用指導において看護師が抱える困難や不安

高槻赤十字病院　看護部[1]、元　高槻赤十字病院　看護部[2]
○加藤　幸枝[1]、米倉　小百合[2]、今戸　美奈子[1]、田中　智美[1]、野口　美香[1]

【目的】当院の看護師が肺がん化学療法の副作用指導をより的確に自信を持って実践できることを目指し、看護師が抱える副作用指導上の困難や不安の内容を明らかにすることを目的とした。
【方法】対象は当院呼吸器科の病棟看護師９名（看護師経験年数：中央値13年（1-30年）、化学療法経験年数:中央値６年（1-21年））。半構成面接法により、肺がん化学療法の副作用指導の実践内容と副作用指導を行う上での困難や不安について尋ねた。面接内容は対象者の同意を得てICレコーダーに録音し、逐語録に起こした。逐語録のデータは、SPSS Text Analysis For Surveys 3.0を用いて単語の出現頻度の分析を行った。倫理的配慮として、対象者には研究目的、方法、プライバシー保護について文書および口頭で説明し、同意書への署名により同意を得た。
【結果】現在実践している副作用指導の内容として出現頻度が高かった副作用の種類は「悪心」「血球減少」「脱毛」であった。副作用指導上の困難や不安については、対象者全員が回答し、出現頻度が高かった単語（名詞）には「自分」「勉強」「仕方」「薬」があった。困難や不安を感じる副作用の種類としては「しびれ」「倦怠感」「口内炎」の単語の出現頻度が高かった。対象特性による回答の違いを検討したところ、化学療法経験年数６年未満の看護師の回答にのみ「勉強」「口腔ケア」「口内炎」の単語が出現していた。逆に、化学療法経験年数６年以上の看護師の回答にのみ出現した単語には「退院後」「統一」があった。
【考察】指導に困難を感じていた「しびれ」「倦怠感」「口内炎」については学習の機会を設け、化学療法経験が少ない看護師には自信を持って指導を行うためのサポートを検討する必要がある。

PA-085

急性期病院におけるがん看護の現状

成田赤十字病院　緩和ケア認定看護師[1]、がん化学療法看護認定看護師[2]、がん化学療法看護認定看護師[3]
○山下　順子[1]、宮田　幸子[2]、篠木　貴子[3]

【目的】当院はがん診療連携拠点病院であり、看護師にはがん看護に対する専門的知識、技術が必要とされる。しかし当院はがん治療専門病棟を持たない急性期病院であり、看護師個々により知識、技術に差があると考えた。そこでがん看護の均霑化を図るため、リンクナースの各部署配置を目指し、がん看護に関する現状調査を行った。
【方法】がん患者と関わりのある看護師（414名）へアンケート調査を実施。データ収集期間H23年10月31日～11月14日。
【結果】回答者290名（回収率70%）。平均経験年数は11年、がん看護の経験のある人は202名であった。がん治療で困っている事は、悪心・嘔吐、口内炎、味覚異常など副作用に関する事、それに伴う患者の不安の訴えへの対応であった。また、薬剤の投与管理に対する看護師自身の不安もあった。終末期に関しては疼痛コントロールや腹部症状、浮腫、不安やせん妄という精神症状に対する困難さを感じていた。倫理面ではがん治療の開始、変更、中止に伴う看護師のジレンマが多く見られた。また、それらの困り事は病棟スタッフやリーダー看護師、医師に相談しており、満足度は64%であった。
【考察】がん看護に携わる看護師は、患者の病状の進行によって現れる苦痛症状や治療による副作用、また、それらにより引き起こされる精神的苦痛の対応に、困難さを感じている事が今回の調査で明らかになった。また、それらをリーダー看護師に相談している事から、スタッフの中で専門的知識を持った、リーダー的存在をリンクナースとして育成し、がん看護関連の認定看護師との連携を図る必要性が示唆された。